

# Dear地球民

第14号  
1995年7月発行

編集発行ゆがわら国際交流協会  
☎259-03 神奈川県足柄下郡湯河原町土肥1-7-1  
湯河原町商工会内 ☎0465-63-0111

## 国際理解講座「近年の中国事情」 …露木裕子先生に聞く…

5月26日、当協会通常総会の後「近年の中国事情」と題して、国際理解講座が開催されました。お話しは、7年にわたって協会中国語講座の講師を努めていただいている、露木裕子先生（真鶴町在住）。露木先生は、藤沢市役所で通訳など国際交流関係の仕事についておられます。また、ツアーコンダクターとしても活躍され、年に数回中国へ渡っておいでですが、つい先日は中・パ国境、カラクリ湖まで足を延ばされたとか。露木先生が、上海復旦大学に留学中だった10年前の中国と現在とは、どのように社会が変わったのでしょうか。今の中国は、文革が終わって一段落、自由化の時期と引き締めの時期が交互に訪れているそうです。現代中国の素顔がうかがえるエピソードを、幾つか紹介していただきました。

- ・中国は大きな国で、話されている中国語も実は様々。留学のため初めて上海を訪れたときは、日本で学んだ中国語（北京語）が、全く通じずショックを受けたが、現在は全国的に学校教育は北京語でなされ、テレビの影響もあって、子供達は、きれいな北京語を話す。チベットでも北京語は通じる。
- ・今の上海で憧れの職業はタクシー運転手。一般の人の月収が400元（約4000円）なのに、彼らは月1万元稼ぐ。一番お金のもうかる職業はブローカー、その反対は教師で、学校の先生の多くは、勤めが終わった後、私塾を開いている。
- ・自分で商売を始め大金持ちになった、ニューリッチと呼ばれる階層が生まれた。ニューリッチの子供達が行く私立学校は、供託金だけで25万元かかる。全寮制で、「貴族学校」と呼ばれている。また生活に余裕のでてきた人達の間で、高級ペットブームが起きている。以前は衛生などの問題から、中国では犬を飼う習慣はなかった。
- ・お金持ちの中には、自費で海外パック旅行に出る人が増えている。行き先は、タイ、シンガポール、香港などが人気。旅行先で、金（きん）を買う。

・電話の普及率はまだ低いですが、都市部では”PB機”と呼ばれるポケベルが大流行。逐次、株価情報が入るからだとか。

・一人っ子（双子も含む）に国が手当を支給する「一人っ子政策」がとられて久しいが、手当を得るため実際生まれたのに無届けの、戸籍のない子供が全国に200万人存在する。この子たちは教育を受ける機会も持たない。また農村には、明らかに年の違う双子や三ツ子がいたりする。

・留学中に日本から送ってもらった雑誌は、検閲され、破られているページがあった。当時は、女性の肩が出ているだけで猥褻と見なされたが、昨今は規制もかなりゆるやかである。

・公務員の月給は約400元だが、実際、給与と呼ばれるものの中には見えにくい部分もあって、大都市では倍の800元もらっていると考えてよい。手当や現物給与はこれに含まれないからである。一人っ子手当、通勤手当、風呂手当、理髪手当、魚・肉の配給切符、現物支給品には、草履、タオル、石鹸、服、たまにスイカ20コ、などがある。

現地をよく知り、中国を心から愛している露木先生ならではの、お話しをたくさん伺いました。留学中のルームメイトだった女性は、現在、上海のテレビ局のディレクターで、今でも大親友だそうです。中国は何と言っても歴史と文明の国。日本が中国からどれだけ多くのものを学んできたかは、誰もが知るとおりです。古い中国も今の中国も、私たちにとって、とても重要な存在と言えるでしょう。



昨年6月、ゆがわら国際交流協会の有志13名が、オーストラリアを旅しました。一番の目的は、メルボルンの西にあるジーロング市の訪問です。ここには、93年やっさ国際交流に参加した二人の女子中学生ジェニー・ブライアントさん(ホストファミリー、二見昌義さんご一家)、ブルック・セガンさん(同、土屋誠一さんご一家)がいるのです。はてさて、どんな旅になったのでしょうか。参加最年少の松野さんに感想を書いていただきました。

## オーストラリアに友を訪ねて... (その1)

出発の1週間前、わたしの家に届いたジュニーからの手紙には“I miss you!”と書いてあった。ジュニーとの出会いは、去年のやっさ国際交流。いろいろなプログラムを通じて仲良くなりこの1年間、手紙を通してお付き合いをしてきた彼女と、こんなに早く再会できるとは思ってもよらなかった。手紙が届いた日から、私の気持ちはすでにオーストラリアにいていた。

6月5日、成田へ向かうバスの中では、伊藤会長を始め、よく知っている方と、知らない方の半分半分で、総勢13名。いったいこの旅行は... と不安になったのもつかの間。成田につけば、皆10年来の知り合いのよう。これなら“No problem!” 午後9時15分、いよいよフライト。8時間の長旅の後、シドニー乗り換えでメルボルンへ。空港からはバスに乗り異国の見慣れない景色を眺めて、“...ひっ、広い!”を連発しながら、ようやく一日目のホテルへ到着。やっと一息、“夕食までは寝れるなっ!”などと、甘い考えをもったのは、どうやら私1人のようでした。“オーストラリアにきたらやっぱりコアラをみなきゃねえ。”の一声に、全員おそろいで動物園へ“Let's go!?”動物園までは“トラム”という、路面電車に乗ったのですが、オーストラリアというところは、国も大きければ人もアバウトというか、電車から降り私たちは線路を横切り反対側へ、もちろんその間、電車は止まって待っていてくれるといった始末。

園内に入るとまず目の中に飛び込んで来たのは、たくさんの種類の植物でした。6月といえば、オーストラリアは秋から冬に変わろうという季節なのですが、なんと“あじさい”、そして側には“すすき”が...?へんなのっ! さらに歩いて行くと、いよいよ看板に動物の名前がでて来た。最近オーストラリアで、コアラに並んで人気のでてきた動物と言え、ば、“ウォンバット”。外見は、豚と猪をたして2で割ったような感じで、“えさを食べてはモゾモゾと、おりの中を走り回る”という動作を何度も何度も繰り返す。バカにしたくなるほど、キュートな奴。次はやっぱり“コアラ”ですね。ユーカリの木の上のほうにボデっとくっついている、あれがコアラ?ガイドブックによれば、コアラは夜行性の動物で昼間はあまり動かないとのことで、唯一の動きといえば片足でお尻をシャカシャカかいているくらい。個人的には、断然ウォンバットのほうが好きだなぁ。

その晩の食事には、生まれて初めてのカンガルーのステーキなるものも含め、ボーイさんも“Wow!”とたまげるほどの量をいとも簡単にたいらげてしまいました。そんなこんなで、長い長いオーストラリアの第1日目が幕を閉じました。

6月7日、メルボルンにて2日目を迎えた。ホテルの窓からは、静かな町並みが見える。市内を散策しながら、到着したところは、マーケット。ここには、肉、野菜、果物、パン、チーズなどの売り場があり、その他、Tシャツなどの被服類、お土産物屋など、『ここに来れば、一通り何でも揃う。』と言った感じでした。町の中を走る路面電車“トラム”の1日券を買った私たちは、我が物顔で乗ったり降りたり。ちょっと気味の悪い“OLD JAIL(旧監獄)”、“キャプテンクックの生家”を見学した人もいました。

昼食には中華街に“ヤムチャ”を食べに行きました。様々な人種が混じりあって生活している国と言え、すぐに浮かんでくるのは、アメリカ。でも、驚いたことにオーストラリアでも、色々な国からの人々が生活しています。とくに中国の影響が強いため、オーストラリアの人は、チャイニーズ料理をよく食べているようです。

午後、本日のメインイベント“ペンギンパレード見学”にメルボルンの南東にあるフィリップ島へ向かいました。途中、ある牧場を訪れ、放し飼いにしているカンガルーに餌をあげたり、触ったりすることができました。...が、私たちは前日、“カンガルーステーキ”をしっかりと食べているのです。こんなにカワイイ“カンガルー”を、食べてしまったぁー?! 残酷物語です。

牧場を出発し、バスはフィリップ島へ向って走る。フィリップ島は、夏の避暑地として有名で、別荘が多い。でも、今は冬なので閑散としていました。バスが止まったのは、丘のうえのパーキングのような所で、『えっ、休憩?』と間違えてしまいました。そこから下って、海へ歩いて行きます。すると、観客席のようになって、そこに座ってペンギンが現れるまで、待つ・待つ・待つ。『まだかなぁー』。20分くらいして、偵察係の1匹がやって来た。ちょこちょこ砂浜を歩き、丘の上にあがって来て『キュワーッ』と合図をする。すると、その声に呼び寄せられた第一分団が登場。1グループ約20~30羽くらいで、三方向から来て、これが3回繰り返され、合計250~300羽くらいのペンギンたちがやって来た。ペンギンたち、丘の茂みにある自分のお家めざして、まっしぐら。途中にある、ワカメなどの障害物をクリアしながらコケル奴もいれば、遅れる奴もいる。まるで、コメディショーを見ているよう。ペンギンたちと一緒に私たちも丘を登って行くと、すぐ足元にいるんですよ。身長約20cmの、おちびサンたち。連れて帰って来たかった。オーストラリアの自然を満喫した、旅行2日目でした。~つづく~

(松野 由紀子)

次号では、いよいよ懐かしいジュニーに再会します。



## 外国人とのふれあい

国際交流協会の本来の目的は外国人とのふれあいが主な目的であり、毎年の如く色々の国の人達との交流が増えているのは、喜ばしい限りである。

さて、今回は二人のアメリカ人をピックアップしてみようと思う。一人は白人で、もう一人は日系三世である。この二人を比較してみると、まことに興味があり、いかにも現在の日米の複雑な関係を象徴している現実をみる思いがするのである。

白人はニューヨークのカーネギ・メロン大学出身の立派な画家であり、とくに日本の水彩画と書道に興味があり、つてを求めて五年前に来日し、今回縁があって、日本人の女性と結婚し、より深く日本を理解しようと努力している。ペンシルバニアから両親と妹を呼び寄せ、二宮報徳神社で神前結婚式を挙げ、母親と妹と本人は着物を着て、神の御前での誓いの言葉まで、日本語で読まされことになり、さすがに日本人でさえあまり親しみの無い日本語なので、私があらかじめ録音し、それをローマ字で書いて、幾度も練習を繰り返し、ことなきを得た。

私の会話の先生でもあり、下手な英語でのテーマで、日米のこじれた問題を取り上げることが多いが、日本に住んでいるいるからこそ、冷静な判断ができるのだと思うことが多い。日米の文化のギャップはあるのは当然のことで、論理的に、冷静に語りあうことにより、力で押しつけようとするアメリカの政策を批判できるのは、お互いの理解が足りないからだ痛感する。

もう一人の日系三世は、むしろ逆現象で、アメリカで育ったのだから、文化、習慣のギャップをどうしても埋められない点がある。これも偶然五年程前から日本との商売を始めたが、あらゆる点で積極的に理解をしようとしなない。

先日も来日した時に風邪で39度の熱を出し、夜の10時ころ、アスピリンを買ってほしいと急に言い出しので、今頃薬屋さんは営業をやっていないと説明したら、セブンイレブンで買えるではないかと言うので、日本は医薬での制限があり、この種の店では売れないのだと理解させるのに一苦労させられたのである。

救急車に問い合わせをして、夜間の医者を探し、注射を打って貰ったらどうだと勧めたところ、目の色を変えてノーノーと言うので、それで我慢するしかしかたがないと言って聞かせ、翌日薬を購入し、やっと熱に効果があったので一安心した。

アメリカでは、救急車、夜間の医者のお世話を受けると、最低5万円はかかるので、彼は目の色を変えて断った理由が分かった。これはよく考えてみると、日本での医療制度がよく行き届いていて、比較的安くサービスが受けられることを英語で説明できなかつたのであるが、これも大きな文化や

制度の違いがあり、今更ながら日本での有り難さを当然のように受けているが、日本人が外国に旅行して、恥じを掻いたり、災難に巡り合うことの実例を知るたびに、お互いの理解不足を痛感することが多いが、事が起こってからでは命に関わることすらあり得る。本当の意味での国際化とは、お互いの文化、習慣の違いを理解することから始まるのだと、あらためて考えさせられる。

自動車の部品問題でアメリカとの交渉がこじれているが、この報復のため、アメリカは100%の関税をかけてきたことはニュースでご承知の通りだが、アメリカのある新聞では、アメリカの自国の制裁措置を批判していた。日本は当然この処置に対抗するだろうし、コストを下げるために、さらに努力をするだろう。

例えばその一例として、ジュースのコップがおける部品をはずせば、アメリカの運転する人は、特にラルフ・ローレンやらアルマーニの高級服を着ている人は、ジュースの缶を置くのに苦勞するだろう、と言うようなジョークを書いてあった。

日本の新聞は記事は殆ど感情的になり、心の余裕がないので、ジョークなどを書いたりすると、上司から怒られ、記事はボツになるのがせいぜいだろう。

あまり論理的な物の言い様は味気無いが、そろそろ日本人も国際的場面ではジョークの一つでも言えるようになればと思いたい。(石井宏樹)

## 【活動報告】

### クリスマスパーティー

'94.12.22スタジオ千夢に約70名の方が集いました。ちょうど湯河原中学校に短期留学中だったニュージーランドの中学生ドロシーさんも、ホストファミリーの八亀昌雅さん、鈴木一憲さんご一家とおそろいで参加しました。

### 募金協力

クリスマスパーティーでのオークション売上金¥69,620及びその他の募金を、下記のとおり寄付致しました。

シャプラニール阪神大震災義援金... ¥20,000

日本ユニセフ協会..... ¥20,000

地球大学アフリカ貧困家庭救済基金..... ¥42,000

アジアいちご基金(タイ国障害児へ).. ¥20,000

### ——ホストファミリー大募集！——

外国人学生ホームステイプログラム《第10回やっさ国際交流》が、7月30日(日)から8月6日(日)の予定で行われます。ブラジルからの短期研修大学生および東京で学んでいるアジアを中心とした留学生、約20名が参加します。協会では、期間中7泊8日、学生のホームステイを受け入れていただけるご家庭を募集しております。外国語が話せなくても結構です。普段の生活の中で、お客様扱いすることなく受け入れて下さればうれしく存じます。詳しくは、協会事務局(☎63-0111)までお問い合わせください。